

小学校体育科における 体づくり運動に関する調査研究

－領域内の各運動に関する意識調査を通して－

佐々木 浩

【キーワード】 小学校体育、体づくり運動、指導法、授業づくり

I. 緒言

スポーツ庁は、令和3年12月に、令和3年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果を公表した。その報告書によると、体力合計点は、COVID-19の感染拡大前と比べて男女とも一様に低下する結果となった。また、男子では全8種目の合計点の平均値が、小中とも現在の調査方式になった平成20年度以降、最も低い値となった。同庁はその背景として「令和元年度にも見られた運動時間の減少や、生活習慣の変化に伴う学習以外のスクリーンタイムの増加などが考えられる」（スポーツ庁、2021）としている。さらに「約4割の児童生徒はコロナの影響を受けて、運動やスポーツをする時間が減少した」（スポーツ庁、2021）としており、これらのことが、体力低下の一因になっていることが推察される。この結果から、今後、子供たちに運動やスポーツの楽しさを実感させ、その習慣の定着を図ることへの再認識が求められていくと考えられる。実際に、体力向上は学校教育活動全体で行うが、既に体育授業への役割の重要性がさらに増した（三田部、2022）という指摘もされている。スポーツ庁（2021）も、児童生徒の実態に照らして、着実に継続的な取組を進める必要があるとし、体育の授業等においてできることから実施していくことが重要であると指摘している。

その体育の授業の中でも、子供たちの体力向上に深くかかわる領域が「体づくり運動」である。「体づくり運動」は、平成10～11年の学習指導要領の改訂から「体操」領域に代わって示された新しい領域である。その後、平成20～21年、平成29～31年^{注1)}と2回の改訂を経て現在の形となった。小学校における体づくり運動のねらいは、「体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動好きになるとともに、心と体との関係に気付いたり、仲間と交流したりすることや、様々な基本的な体の動きを身に付けたり、体の動きを高めたりして、体力を高めるために行われる運動」（文部科学省、2018）と示されており、「体操」領域の時代より、

体力を高めることを学習の直接のねらいとしている唯一の領域として存在している。また、小学校において、今回の改訂では、高学年の内容の名称変更（「体力を高める運動」から「体の動きを高める運動」）が行われた。この「体の動きを高める運動」は、「児童が自己の体力の向上を、新体力テストの結果等に見られる回数や記録ではなく、体の基本的な動きを高めることと捉えること」（文部科学省、2018）を目指しての変更となり、高める体力を「動き」としてとらえることが明記された。すなわち、体力数値の向上は、優れた実践結果における質の高い動きの獲得によるものであり、そのもの自体が目的ではないと解釈することができる。また、「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体の動きを高める運動」は、体の様々な動きを身に付けたり高めたりすることが主なねらいであり、その例示されている動きは、他の領域において扱われにくい体の様々な動きであり、それぞれが特定の技能を示すものではない。したがって、指導内容は「知識及び技能」ではなく「知識及び運動」と示されている。これらの記述からも、体づくり運動と他の領域では、特性のとらえ方や授業づくりに基本的な違いがあることを確認することができる。

しかしながら、スポーツ文化としての体系を持たない体づくり運動は、学校現場では、何をどう扱えばよいのかイメージが十分に湧かないという声が聞かれる（佐藤、2017）という。また、どのようなゴールイメージを持って授業を構想していけばよいのか分かりづらいといった課題も聞かれる（清田、2020）という。現に、千木良（2014）の報告によると、東京都公立小学校教員1,299名を対象として行われた質問紙調査では、体づくり運動を指導しにくいと感じる教員が48.6%と半数近くいるという。そのほか、小学校現場における体づくり運動の実施実態についての研究では、深谷ほか（2016）によると、多くの教員は、領域の重要性は認識しているものの、単独単元としては実施しにくいと感じており、高田・筒井（2017）の報告では、指導の自信が乏しく教員間の指導内容に偏りがあるとされている。また、清田・本多（2019）によると、体づくり運動は、定型の運動様式が決まっていないため、指導者の自由な発想で、児童の実態に応じた授業を工夫できる一方で、その内容の曖昧さがこれまで指導上での悩みを生んできたという。さらに、長野ほか（2021）は、小学校教員の共通の悩みとして「効果的な場づくり」があると報告している。

このように、体づくり運動は、その誕生から約20年経ち、他の領域と違い「2学年にわたって指導すること」（文部科学省、2018）と明記されているように、その必要性は理解されているものの、同時に主に指導法や教材作成において様々な課題も見受けられる。一方、筆者らは、小学校教員を対象に体づくり運動を含む各運動領域に関して、授業づくりの計画と実践に当たる教材作成と指導法に焦点を当てて実態調査を行った。そして、それらを相対的に比較検討することによ

り体づくり運動の現状を浮き彫りにした。その結果、指導法に関しては他の運動領域と異なり、体づくり運動だけが、若手教員（10年未満）、中堅・ベテラン教員（10年以上）といった教職経験の区分に差が見られず、教職経験を積んでも指導法に関しての意識が有意に向上しないことが明らかになった（佐々木ほか、2021）。

しかし、小学校教員を対象としたこれらの先行研究は、その多くが体づくり運動領域全体に焦点を当てた実態調査が中心である。領域内の各運動内容の調査では、岡野ほか（2010）が、「体力を高める運動」に関して意識調査を実施しているが、領域内の他の運動内容と比較した報告は見当たらない。筆者らの研究も、体づくり運動をひとくくりの領域として調査している。しかし、体づくり運動はその内容に、体ほぐしの運動（遊び）、多様な動きをつくる運動（遊び）、体の動きを高める運動が位置付けられており、それぞれのねらいも違う。したがって、教員によっては、それぞれの指導法や教材作成に関して、意識の違いを感じていることが推察される。

そこで本研究では、小学校教員を対象とした筆者らの研究で、教職経験を積んでも有意差が生じない結果となった体づくり運動領域全体の指導法に関する意識^{注2)}に対して、領域内の各運動内容では、その意識に違いが生じるのかを比較検討することにより、今後の体づくり運動の授業づくりについての示唆を与えることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査方法と項目

これまでの体育授業実践を通して抱えてきた、体づくり運動の各内容に関しての意識を測定するために、高田ほか（2017）と渡部（2014）の知見を参考に質問紙調査法により調査を行った。回答形式は、「4：しやすい」、「3：どちらかというとしやすい」、「2：どちらかというとしにくい」、「1：しにくい」の4件法を用いた。

なお、本研究では、先行研究を踏まえ、研究の独自性を担保するために、体づくり運動領域内の各内容との比較と合わせて教員経験年数にも着目して分析検討を行った。

2. 調査対象と手続き

調査は、S県内の東部地区、南部地区の2市を選定し、同意が得られた51校に対して、2019年10月中旬から11月下旬にかけて在籍する全ての教諭を対象に実施された。

回答は無記名とし、フェイスシートには「年齢(年代)」、「教職経験年数(年代)」

「担当学年」等の記入を求めた。その結果、624名の回答が得られた。回答欄に未記入・無回答があるものについては無効回答とし、残りを有効回答とした。

さらに本研究では、多様な経験年数の小学校教師を調査対象としているため、教職経験歴を年代で区分けして比較検討した。吉崎（1998）は、教師の生涯発達を「初心期」（教職3年目ぐらいまで）、「中堅期」（教職5年目から15年目ぐらいまで）、「熟練期」（20年目以降）といった3段階でとらえている。一方、改正教育職員免許法の成立により、令和4年7月1日に教員免許更新制は解消されたが、それまで教員免許は、取得後10年間が有効とされており、教員は各自研修を受講することによりその更新を行い教員としての身分を保持していた。同様に、現在法定研修として実施されている中堅教諭等資質向上研修^{注3)}も、10年経験者研修を引き継いだものである。このことから、10年が教師としてのライフサイクルの一つの周期として考えることができる。

上記の研究や法定制度を参考に、本研究では、1～9年目までを「若手教員」10年以上を「中堅・ベテラン教員」として区分することとする。この教員歴別に分類すると、1年目から9年目が346人、10年目以上が278人であった（表1）。なお本研究は、人を対象とした研究に関する国士舘大学倫理委員会専門部会で審査され、その承認を受けた。

表1 教員の属性

| 経験年数 | 1年～9年 | 10年以上 | 合計 |
|------|--------|--------|---------|
| 人数 | 346人 | 278人 | 624人 |
| 割合 | 55.40% | 44.60% | 100.00% |

3. 統計処理

体づくり運動領域内の各運動に対する指導法の意識の違いを分析するために、F検定を行い、等分散性の有無を確認したのち、対応のないt検定を行った。また、教員の年次経験による意識の違いを分析するために χ^2 検定を行った。分析には、Microsoft Excel 2016を用いた。なお、有意水準はいずれも5%未満とした。さらに、多重比較においてはBonferroni補正を行い、 p 値を修正した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 領域内の「指導法」について

現在の担当学年において、体づくり運動領域内の「指導法」に関して調査した結果、(3+4)の割合が一番高かったのが「体力を高める運動」で70.2%、次に「多様な動きをつくる運動（遊び）」で67.1%、そして一番低い値となったのが「体

ほぐしの運動」で、61.9%であった（図1）。

この内訳を見てみると、「体力を高める運動」の平均値が、2.79（ $SD:0.65$, $N=282$ ）。「多様な動きをつくる運動（遊び）」の平均値が2.74（ $SD:0.64$, $N=416$ ）、「体ほぐしの運動」の平均値が2.68（ $SD:0.69$, $N=606$ ）となった（表2）。

さらに、この各運動間の平均値に対して、 F 検定の後対応のない t 検定を行ったところ、「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」との間で有意な差が認められた（ $t(886) = 2.126$, $p = .034$ ）（表3）。

これらのことから、「体づくり運動」領域の中では、特に「体ほぐしの運動」に関して指導しにくさを抱いている教員が多いことが明らかになった。

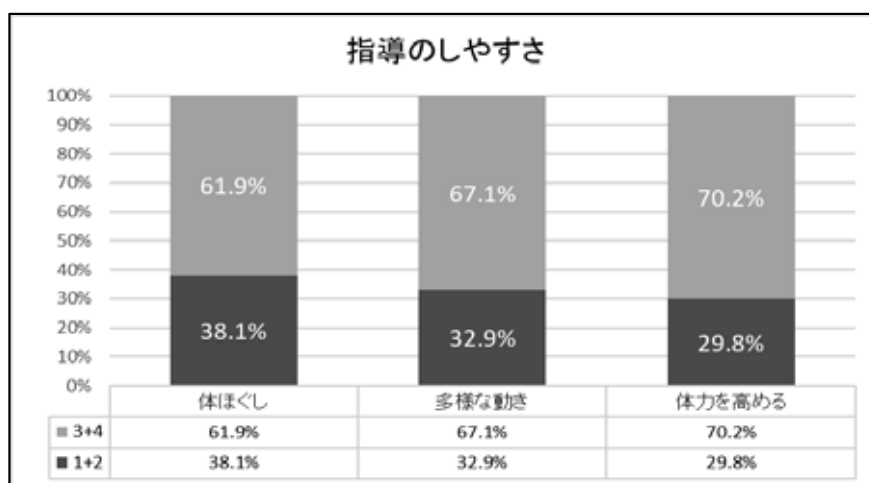


図1 指導法について（4件法）①

表2 指導法について（4件法）②^{注4)}

| 領域及び運動名 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 合計 | M | SD |
|------------|----|--------|--------------------|------------------------|--------|--------|------|------|
| | | 指導しにくい | どちらかという と指導しにくい | どちらか という と指導しやすい | 指導しやすい | | | |
| 体ほぐし | 人数 | 20 | 211 | 316 | 59 | 606 | 2.68 | |
| | 割合 | 3.3% | 34.8% | 52.1% | 9.7% | 100.0% | 0.69 | |
| 多様な動き | 人数 | 8 | 129 | 242 | 37 | 416 | 2.74 | |
| | 割合 | 1.9% | 31.0% | 58.2% | 8.9% | 100.0% | 0.64 | |
| 体力を 高める | 人数 | 6 | 78 | 168 | 30 | 282 | 2.79 | |
| | 割合 | 2.1% | 27.7% | 59.6% | 10.6% | 100.0% | 0.65 | |

表3 指導法について③

| 体ほぐし | | 多様な動き | | <i>t</i> | <i>p</i> |
|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|
| <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | | |
| 2.68 | 0.69 | 2.74 | 0.64 | 1.339 | 0.090 |
| 体ほぐし | | 体力を高める | | <i>t</i> | <i>p</i> |
| <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | | |
| 2.68 | 0.69 | 2.74 | 0.64 | 2.126 | 0.034* |
| 体力を高める | | 多様な動き | | <i>t</i> | <i>p</i> |
| <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | | |
| 2.79 | 0.65 | 2.74 | 0.64 | 0.942 | 0.346 |

**p*<.05

2. 教員経験の差による「指導法」について

次に、この調査結果を「若手教員」（10年未満）と「中堅・ベテラン教員」（10年以上）に区分して、「指導のしやすさ」に関しての割合を導き、クロス集計を行った。結果に関しては、 χ^2 検定を行った（表4）。その結果、「多様な動きをつくる運動（遊び）」のみ有意差を確認することができた。この点に関して、「体力を高める運動」は、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）の「3：どちらかという指導しやすい」と「4：指導しやすい」（3+4）の割合の差は1.1ポイントしかなく、さらに、その合計平均が70.2%と領域内で一番高く、高止まりの傾向が見られるため有意差が生じなかったものと考えられる。他方、「体ほぐしの運動」では、「3：どちらかという指導しやすい」と「4：指導しやすい」（3+4）の合計平均の割合は、61.9%と低く、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）の差も、3.7ポイントと少ない結果であった。そのため有意差が生じなかったものと考えられる。

以上の点より、体づくり運動領域内では、「多様な動きをつくる運動（遊び）」に関してのみ、教職経験を積むことによって「指導法」に関して意識の向上がみられることが明らかとなった。しかし、それ以外の運動は、領域全体を含み、教職経験を積んでも意識が向上するということを期待することは難しいと考えることができる。特に「体ほぐしの運動」に関しては、「3：どちらかという指導しやすい」と「4：指導しやすい」（3+4）の割合が、全体で61.9%と領域内でも一番低く、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）との差も3.7ポイントと一番少ない。これらのことから、「体ほぐしの運動」に関しては、多くの教員がその教職経験値の違いに限らず指導に関しての課題を抱えており、何らかの支援をする必要性があることが示唆される。

表4 指導法について (4件法) ④

| | | 経験 | | 1+2 | | 3+4 | | 合計 | χ^2 | <i>p</i> |
|------------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|--|-----|----------|----------|
| 体づくり 運動 | 10年未満 | 120 | 34.7% | 226 | 65.3% | | | 346 | 3.265 | 0.071 |
| | 10年以上 | 77 | 27.9% | 199 | 72.1% | | | 276 | | |
| | 合計 | 197 | 31.7% | 425 | 68.3% | | | 622 | | |
| 体ほぐし | 10年未満 | 131 | 39.8% | 198 | 60.2% | | | 329 | 0.881 | 0.348 |
| | 10年以上 | 100 | 36.1% | 177 | 63.9% | | | 277 | | |
| | 合計 | 231 | 38.1% | 375 | 61.9% | | | 606 | | |
| 多様な 動き | 10年未満 | 88 | 38.4% | 141 | 61.6% | | | 229 | 6.965 | 0.008** |
| | 10年以上 | 49 | 26.2% | 138 | 73.8% | | | 187 | | |
| | 合計 | 137 | 32.9% | 279 | 67.1% | | | 416 | | |
| 体力を 高める | 10年未満 | 49 | 29.3% | 118 | 70.7% | | | 167 | 0.039 | 0.844 |
| | 10年以上 | 35 | 30.4% | 80 | 69.6% | | | 115 | | |
| | 合計 | 84 | 29.8% | 198 | 70.2% | | | 282 | | |

***p*<.01

3. 指導しにくさの理由について

次に、領域内の各運動内容に関して、「1：指導しにくい」と「2：どちらかという指導しにくい」を選択した理由を調査した。その結果、「体ほぐしの運動」、「多様な動きをつくる運動（遊び）」、「体力を高める運動」のすべてにおいて、「教え方が難しい」、「評価しづらい」、「何を教えてよいかわからない」の3項目がいずれも上位項目となった（表5, 6, 7）。

そこで、その上位3項目「何を教えてよいかわからない」、「評価しづらい」、「教え方が難しい」について、運動内容毎にそれぞれ「若手教員」（10年未満）と「中堅・ベテラン教員」（10年以上）で、その割合に違いがみられるかクロス集計し、 χ^2 検定を行った（表8, 10, 11）。

その結果、「体ほぐしの運動」においては有意な差が認められたが、「多様な動きをつくる運動（遊び）」と「体力を高める運動」においては、有意な差は認められなかった。そこで、「体ほぐしの運動」に関しては、さらに項目毎にクロス集計を行い、 χ^2 検定を行った。その際、多重比較においてはBonferroni補正を行い、*p*値を修正した（表9）。

その結果、「評価しづらい」と「教え方が難しい」に関してと「評価しづらい」と「何を教えてよいかわからない」の比較に関して、有意な差が認められた。これは、「評価しづらい」の数値を見てみると、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）とでは割合の差が0.8ポイントしかなく、経験値による意識の違いに差が見られなかったためと考えられる。

以上の結果により、「体ほぐしの運動」の「評価しづらさ」に関しては、多くの教員が教職経験を重ねていっても、課題を抱えたままであると推察することができる。

表5 指導しにくい理由「体ほぐしの運動」(複数回答)

| 教職経験 | 自分が経験したことがない | 自分が苦手 | 子どもたちが好まない | 何を教えてよいかからない | 指導してつまらない | 評価しづらい | 教材づくりが大変 | 特性がよくわからない | 教え方が難しい | 多様な動き方や体力を高める運動と区別がつけづらい | 合計 |
|-------|--------------|-------|------------|--------------|-----------|--------|----------|------------|---------|--------------------------|-----|
| 10年未満 | 42 | 39 | 11 | 75 | 8 | 62 | 10 | 65 | 95 | 33 | 440 |
| 10年以上 | 29 | 31 | 5 | 35 | 1 | 61 | 14 | 2 | 49 | 30 | 257 |
| 全体 | 71 | 70 | 16 | 110 | 9 | 123 | 24 | 67 | 144 | 63 | 697 |

表6 指導しにくい理由「多様な動きをつくる運動(遊び)」(複数回答)

| 教職経験 | 自分が経験したことがない | 自分が苦手 | 子どもたちが好まない | 何を教えてよいかからない | 指導してつまらない | 評価しづらい | 教材づくりが大変 | 特性がよくわからない | 教え方が難しい | 多様な動き方や体力を高める運動と区別がつけづらい | 合計 |
|-------|--------------|-------|------------|--------------|-----------|--------|----------|------------|---------|--------------------------|-----|
| 10年未満 | 28 | 18 | 3 | 48 | 4 | 33 | 7 | 27 | 47 | 11 | 226 |
| 10年以上 | 15 | 13 | 3 | 21 | 0 | 28 | 8 | 17 | 23 | 14 | 142 |
| 全体 | 43 | 31 | 6 | 69 | 4 | 61 | 15 | 44 | 70 | 25 | 368 |

表7 指導しにくい理由「体力を高める運動」(複数回答)

| 教職経験 | 自分が経験したことがない | 自分が苦手 | 子どもたちが好まない | 何を教えてよいかからない | 指導してつまらない | 評価しづらい | 教材づくりが大変 | 特性がよくわからない | 教え方が難しい | 多様な動き方や体力を高める運動と区別がつけづらい | 合計 |
|-------|--------------|-------|------------|--------------|-----------|--------|----------|------------|---------|--------------------------|-----|
| 10年未満 | 5 | 11 | 6 | 19 | 2 | 14 | 6 | 8 | 32 | 7 | 110 |
| 10年以上 | 8 | 9 | 6 | 8 | 3 | 16 | 6 | 11 | 22 | 5 | 94 |
| 全体 | 13 | 20 | 12 | 27 | 5 | 30 | 12 | 19 | 54 | 12 | 204 |

表8 指導しにくい割合「体ほぐしの運動」(教職経験値別) ①

| | 体ほぐし | | | χ^2 | p | | |
|--------|-------|-------|----|----------|-----|-------|---------|
| | 10年未満 | 10年以上 | 合計 | | | | |
| 教え方 | 95 | 66.0% | 49 | 34.0% | 144 | 8.491 | 0.004** |
| 評価 | 62 | 50.4% | 61 | 49.6% | 123 | | |
| 何を教えるか | 75 | 68.2% | 35 | 31.8% | 110 | | |

**p<.01

表9 指導しにくい割合「体ほぐしの運動」(教職経験値別)②

| 体ほぐし | | | | | | χ^2 | <i>p</i> |
|--------|-------|-------|-------|-------|-----|----------|----------|
| | 10年未満 | | 10年以上 | | 合計 | | |
| 教え方 | 95 | 66.0% | 49 | 34.0% | 144 | 6.635 | 0.030* |
| 評価 | 62 | 50.4% | 61 | 49.6% | 123 | | |
| 合計 | 157 | 58.8% | 110 | 41.2% | 267 | | |
| 10年未満 | | | | | | χ^2 | <i>p</i> |
| | 10年未満 | | 10年以上 | | 合計 | | |
| 教え方 | 95 | 66.0% | 49 | 34.0% | 144 | 0.138 | 0.711 |
| 何を教えるか | 75 | 68.2% | 35 | 31.8% | 110 | | |
| 合計 | 170 | 66.9% | 84 | 33.1% | 254 | | |
| 10年未満 | | | | | | χ^2 | <i>p</i> |
| | 10年未満 | | 10年以上 | | 合計 | | |
| 評価 | 62 | 50.4% | 61 | 49.6% | 123 | 7.573 | 0.018* |
| 何を教えるか | 75 | 68.2% | 35 | 31.8% | 110 | | |
| 合計 | 137 | 58.8% | 96 | 41.2% | 233 | | |

**p*<.05

表10 指導しにくい割合「多様な動きをつくる運動(遊び)」
(教職経験値別)

| 多様な動き | | | | | | χ^2 | <i>p</i> |
|--------|-------|-------|-------|-------|----|----------|----------|
| | 10年未満 | | 10年以上 | | 合計 | | |
| 教え方 | 47 | 67.1% | 23 | 32.9% | 70 | 3.523 | 0.061 |
| 評価 | 33 | 54.1% | 28 | 45.9% | 61 | | |
| 何を教えるか | 48 | 69.6% | 21 | 30.4% | 69 | | |

表11 指導しにくい割合「体力を高める運動」(教職経験値別)

| 体力を高める | | | | | | χ^2 | <i>p</i> |
|--------|-------|-------|-------|-------|----|----------|----------|
| | 10年未満 | | 10年以上 | | 合計 | | |
| 教え方 | 32 | 59.3% | 22 | 40.7% | 54 | 3.301 | 0.069 |
| 評価 | 14 | 46.7% | 16 | 53.3% | 30 | | |
| 何を教えるか | 19 | 70.4% | 8 | 29.6% | 27 | | |

IV. まとめ

本研究では、小学校教員を対象とした筆者らの研究で、教職経験を積んでも有意差が生じない結果となった体づくり運動領域全体の指導法に関する意識に対して、領域内の運動内容毎では違いが生じるのかを比較検討することによって、今後の体づくり運動の授業づくりについての示唆を与えることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 領域内の「指導法」について

領域内の各運動内容の『指導のしやすさ』の平均値の割合は、「体ほぐしの運動」が一番低く、一番高い値となった「体力を高める運動」と有意な差が認められた。

このことから、「体づくり運動」領域の中では、特に「体ほぐしの運動」に関して指導しにくさを抱いている教員が多いということが言える。

2. 教員経験の差による「指導法」から

- ① 領域内の運動では、「多様な動きをつくる運動（遊び）」に関してのみ、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）との間に『指導のしやすさ』の意識に有意な差が認められ、教職経験を積むことにより高くなることが分かった。
- ② 「体力を高める運動」と「体ほぐしの運動」は、教職経験の違いで有意差は認められなかった。くわえて、上記まとめ1にあるように「体ほぐしの運動」の『指導のしやすさ』の平均値の割合は、領域内で一番低かった。

これらのことから、「体ほぐしの運動」は、教職経験を積んでも必ずしも指導しやすく感じるようになるとは言えないことが分かった。

3. 指導しにくい理由から

「体ほぐしの運動」では、多くの教員が指導しにくい理由として挙げている『評価しづらい』の項目で、「若手教員」（10年未満）と「中堅・ベテラン教員」（10年以上）の割合が、同じ「教え方が難しい」と「何を教えてよいかわからない」のそれぞれの割合に対して有意な差が認められた（若手教員の割合が有意に少なく、中堅・ベテラン教員の割合が有意に多い）。

このことから、「体ほぐしの運動の評価の仕方」に関しては、多くの教員が苦手意識を抱いており、その意識は、教職経験を積んでもほとんど減少することがないことが分かった。

以上のことから、本研究で小学校教員は、「体づくり運動」領域内における各運動では、「体ほぐしの運動」の指導法に特に課題を抱えていることが明らかとなった。また、その課題は、教職経験を積み重ねていっても容易に解決しないことも明らかとなった。くわえて、教職経験値に限らず、「体ほぐしの運動の評価の仕方」に関して特に課題を抱えていることも明らかとなった。

「体ほぐしの運動」は、特別な運動様式が存在するわけではなく、学校体育の観点からみてふさわしい教材を提供する必要がある（高橋，1999）とされ、その成果は指導する現場の教師の実践研究に委ねられる部分が大きかった。しかし、「体ほぐしの運動」は、もともとその効果がはっきりと見えてこないといった特質を持っており、教材の与え方や扱い方では、教師の指導力が強く求められる。しかし、小学校のほとんどの教師が体育を専門に学んできたわけでもなく、日頃体育科も含めた全教科の教材研究に追われているため、その指導法に対しては、

戸惑いが見られるのが現状である（佐々木，2017）。

一方で、スポーツ庁と日本学校体育研究連合会が主催する全国学校体育研究大会など各種研究大会では、「体づくり運動」の授業が頻繁に展開されており、優れた実践が多数報告されている。さらに、各自治体でも、年次研修と合わせ、教員の体育研修会も毎年実施されている。このように、小学校教員の体育に関する研修体制は、整っていると言える。したがって、今後は、今回の研究で明らかとなった、「体ほぐしの運動の評価の仕方」を含んだ研修への支援が必要であると考えられる。評価は指導の裏返しということもできる。高橋(1999)は、「体ほぐしの運動」では、ふさわしい教材の提供が必要であると述べている。よって、今後、研究者と実践者が一体となった「体ほぐしの運動」の教材提案を含めた授業づくりの一層の研究が求められる。

〈注〉

注1) 小学校においては、今回の改訂で、低学年の領域名を新たに「体づくりの運動遊び」とすることにより、中・高学年の「体づくり運動」と合わせて「体づくり運動系」と称するようになった。本研究では、小学校教員に対する質問紙調査を実施した時期が、改訂された学習指導要領の完全実施前であったため、領域名は「体づくり運動系」ではなく「体づくり運動」として、領域内の「体ほぐしの運動（遊び）」は「体ほぐしの運動」として、「体の動きを高める運動」も、「体力を高める運動」として調査した。したがって、結果の集計考察もそのまま表記することとする。

注2) 本研究において「指導法の意識」とは、「しにくさ」から「しやすさ」の意識のレベルの違いを意味する。

注3) 中堅教諭等資質向上研修は、平成29年度より、「教育公務員特例法等の一部を改正する法律」により、10年経験者研修が改められたものであり、その第24条が「公立の小学校等の教諭等の任命権者は、当該教諭等に対して、個々の能力、適性等に応じて、公立の小学校等における教育に関し相当の経験を有し、その教育活動その他の学校運営の円滑かつ効果的な実施において中核的な役割を果たすことが期待される中堅教諭等としての職務を遂行する上で必要とされる資質の向上を図るために必要な事項に関する研修（中堅教諭等資質向上研修）を実施しなければならない。」となった（文部科学省，2016）。

注4) 意識調査では、現在の担当学年に関しての回答を求めたが、過去の担当学年の指導経験をもとに回答されていたものも散見された。その際、回答に不備の見られなかったものに関しては有効回答として扱った。したがって、「多様な動きをつくる運動（遊び）」と「体力を高める運動」の合計数値が「体づくり運動」の合計数値より上回っ

ている。

〈文献〉

- 千木良康志(2014) 文部科学省の指導資料を授業に活かす. 学校体育実技指導資料第7集「体づくり運動」(改訂版). 体育科教育. 62 (3) : 18-21.
- 深谷秀次・早川健太郎・渡部琢也 (2016) 小学校における「体づくり運動」の状況-教員の意識調査を通して-. 子ども学研究論集 (8). 名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター. pp.5-20.
- 三田部勇 (2022) 体づくり運動における効果的な教材づくりと単元計画. 初等教育資料. No.1019. 62-65.
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編. 東洋館出版社:東京.
- 文部科学省初等中等教育局教職員課 (2016) 教育公務員特例法等の一部を改正する法律について. 平成 28 年 11 月 21 日中央教育審議会教育課程部会資料 4 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/11/24/1379790_4.pdf (2022.6.8 閲覧)
- 長野康平・篠原俊明・中村和彦 (2021) 小学校教員の体づくり運動領域における指導実態と意識: 所属研究部と教職歴による検討. スポーツ教育学研究. 41 (2). pp.49-66.
- 岡野昇・伊藤暢浩・山本俊彦・加納岳拓 (2010) 小学校における「体力を高める運動」に関する意識調査. 三重大学教育学部付属教育実践総合センター紀要. 第 30 号. pp.83-88.
- 佐々木浩 (2017) 戦後小学校体育科における「体づくり運動」の学習指導論の変遷とその問題点. 国士館人文学. 8 (50). pp.37-56.
- 佐々木浩・細越淳二・須甲理生 (2021) 小学校体育科における他の運動領域と比較した体づくり運動系の現状について-計画と実践に当たる教材作成と指導法に焦点を当てて-. 体育授業研究 (24). pp.11-20.
- 佐藤善人 (2017) エビデンスベースの「体づくり運動」を求めて. 体育科教育. 65 (12) : 28-31.
- 清田美紀・本多壮太郎 (2019) 体づくり運動に関する論点整理と実践上の課題について. 福岡教育大学紀要. 第六分冊 (68). pp.1-7.
- 清田美紀 (2020) 体づくり運動の論点. 体育科教育. 68 (5) : 18-21.
- スポーツ庁 (2021) 令和 3 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1411922_00003.html (2022.6.3 閲覧)
- 高田康史・筒井愛知 (2017) 岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察. 吉備国際大学研究紀要. (27). pp.177-188.
- 高橋健夫 (1999) 今月のキーワード体ほぐしの運動. 学校体育 4 月号. p6.

渡部琢也 (2014) 体育科教育における体づくり運動の現状について. 名古屋経営短期大学
紀要. (55). pp.13-22.

吉崎静夫 (1998) 一人立ちへの道筋. 浅田匡・藤岡完治・生田孝至編. 成長する教師 - 教
師学への誘い. 金子書房: 東京. pp.162-173.

〈付記〉

本研究は JSPS 科研費 JP19K11624 の助成を受けたものです。